

普通のおじさんになりました

平野 和弘（元東洋大学教授）

じつは、この8月末日に、定年まで5年ほどありますが、大学を退職しました。

辞めた経緯から書き始めると全体がネガティブなトーンの記事になってしまいそうですから、第二の人生を準備する過程で今までの体験にはなかったような数多くの出会いがありましたので、そちらのお話をメインに書いてみたいと思います。

第二の人生の方向性を考えるにあたっては、私の研究活動の軸足が、近年、学際的な色彩の強い社会文化学会に移ってきている中で、その学会の研究テーマの柱の一つである「町づくり」への関心を共有するようになって、アメリカのオレゴン州のポートランドという小都市が注目を集めていることを知ったことが一つのきっかけとなっており、そこにおいてカフェが重要な役割をしていることから珈琲好きの虫が騒ぎだした、というようなかたちで具体的に具体的な形をとり始めました。

とはいえ、ずっと学校教育の世界から外に出たことのない人間ですから、何からどう手をつけたらいいか暗中模索だったのですが、学校の進路指導にはのってこないようなオルタナティブな生き方、働き方を模索する若者たちを応援し、情報提供を行っている「日本仕事百貨」というサイトで紹介されている「しごとバー」というイベントの企画で、たまたま「とちぎナイト」と銘打って、鹿沼で古民家カフェ事業を展開している風間教司さんが「バーテンダー（このイベントではゲストスピーカーはこう呼ばれています）」として来るというのを見て、虎ノ門の「ニュートーキョー」まで足を運びました。20人も入れば満席になってしまいそうな狭いお店でしたが、参



加者の大半は20代から30代くらいの若い人たちで、常連もいれば初参加者もいて、何か行動を起こしたいという気持ちをもちつつも、迷いやたゆたいを乗り越えるために後押しをしてくれる何かを求めて熱く語り合っていました。私にとって、教師の看板を背負わずにそういう若い人たちと語り合うのは、新鮮な体験でした。

また、風間さんという人が、たんにカフェビジネスの成功者として成功体験を語る人ではなくて、その仕事の中核において、起業を志す若い人たちを後押ししその一歩を踏み出すための試行の場を提供する活動に熱心に取り組んでいること、そうやって若いエネルギーを鹿沼の町に呼び込んで沈滞している地方都市に新しい風を吹かせようとしていることに、深く共感するとともに、そういう仕事の具体的なイメージを与えられて勇気づけられました。それを機縁に、その後何度か鹿沼に

足を運んで風間さんのお仕事の現場を見せていただく中で、この貴重な経験を全国の仲間と共有したいと考えるようになり、2015年度の社会文化学会夏季研究集会を鹿沼に誘致したのですが、この企画は参加者たちから好評を博しました。

そういう経緯の中で、じつは、風間さんに珈琲修業の弟子入りを申し入れたのですが、狭い店舗の厨房にぎりぎりの人数のスタッフが立ち働いているので受け入れるのは難しい、と断られてしまいました。そこでネットで調べて珈琲の焙煎を教えてくれる教室を探して授業料を払って勉強することにしました。私が入った教室は、1回土日2日間の講座を修了するごとに次の段階にステップアップしていく仕組みなのですが、ステップアップした段階をいつ受講するかは人によってまちまちなので、受講メンバーはその都度変わるため、修業友達のネットワークがだんだん広がっていく楽しさがあります。受講者の年齢構成はけっこう幅が広いのですが、ネットワークで継続的に繋がれている人は若い人ばかりです。年齢に関係なく、起業を志す仲間として受け入れられ、対等にコミュニケーションされています。



私の人生の転機は数年前に訪れました。学部新設に伴い、教職課程の認可申請をしたのですが、教員審査の基準が大きく変更され、担当するすべての講義に専門的業績が求められるようになり、専門の研究領域にない講義の教員審査が不合格となりました。新設学部の該当科目は非常勤講師を雇うことで当面しのぐことになりましたが、大学からは早急に必要な業績を作って私が担当できるようにすることが求められました。授業をしている科

目ではあるので教科書を作ることはできると思い、自分の研究は脇において一年間かけて教科書を作成することにしたのですが、その年の夏ごろから私は心身の変調をきたし始めました。その時期はまた母が寝たきりになり、亡くなるまでの一年半ほど群馬と横浜を往復する生活が続いた時期と重なっています。

私の生活はどんどん荒れていきました。身の回りのものを片づけることができなくなり、煩雑な事務作業などは集中力が続かず、結果的に雑務をため込んでますますストレスが昂じるようなことを繰り返していました。昨年春母が亡くなったのですが、その時期、新しい基準に対応するためには教科書だけでは全然足りず、当分の間、素人のにわか勉強で専門外の論文を書かされるという苦行が続くことが明らかになり、「辞めたい」という言葉が頭から離れなくなりました。

辞めてどうするという当てなどなかったので半年くらい悶々としていましたが、決断して動き出してみたところ、冒頭に書いたような展開が拓けてきて現在に至ります。

